

○今回のポイント

中世カトリックからの解放は、人間の在り方を求めさせた！！

第4編 第2章 第1節 第2項「宗教観の転換」の続き

1.内面からの信仰[① カルヴァン](教科書 p.124～)

(1)[② 予定説]…罪からの救済は、教会でも個人の信仰でもない。救済はすべて、神の意志によって定められているのであり、ある者には永遠の生命が、ある者には永遠の滅亡が予定されている。

では人はこの世においてどう生きれば良いのか？

[③ 勤勉に働く]ことが人間の救い

(2)[④ カルヴィニズム]…信者は神の予定のもとで自分が選ばれていることの実証を得るために禁欲的に職業に励み、自己を神の意志を実現する道具として自覚する。そのため、労働によって得た富は正統であり、神聖なものとなる。金銭蓄財の肯定。

(3)M.ウェーバー 『[⑤ プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神]』

⇒予定説のもとで人々が救いの証を得るために、神の栄光をあらわす世俗的な職業に励み、禁欲的な生活を送って利潤を蓄積したことが、資本の形成につながり、近代資本主義の精神を生む要因になったと分析。

補論.[⑥ 反宗教改革]

・プロテスタントの宗教改革に対抗するため、ローマ=カトリック教会で起こった改革運動。カトリックの教義を守って内部の規律を正し、修道会を設置し、海外布教などを行ってカトリックを広めた。[⑦ イグナティウス=デ=ロヨラ]が設立したイエズス会などが有名。日本にきたフランシスコ=ザビエルもイエズス会士。

第4編 第2章 第1節 第3項「人間の偉大と限界」 (教科書 p.127～)

1.モラリストの想い

「人間とは何か」「人間としての尊厳の根拠はどこにあるのか」

16世紀～17世紀におけるモラリストの活躍

※[⑧ モラリスト]…人間と社会について観察し、その真の在り方を探究した思想家。

2.私は何を知るか[⑨ モンテーニュ] 『エッセー』

ユグノー戦争の勃発

1562～98におこなわれたフランスの宗教戦争。アンリ 4 世がブルボン朝を開き、新教から旧教に改宗して個人の信仰の自由を認め、終結した。

↓
何がこのような悲惨な事態を生み出すのか？

↓
答え。「人間とは何か」「自己とはなにか」という問いかけが欠如しているため。

↓ (これにより不遜さ、精神敵対だ、独断や偏見、不寛容が生じる)

↓
人間として望まれるのは

↓ ⇒「自己自身に謙虚になり、さまざまな人間の生き方や考え方を学ぶこと」

※「[⑩ ク・セ・ジュ?]」(私は何を知るか)

モンテーニュの懐疑主義をあらわす言葉。不完全な人間の理性によっては普遍の真理を認識することはできない。「人間はつねに真理の探究中であるから断定を差し控えるべきだ」という意味。理性の傲慢をいましめ、つねに疑い、より深い真理探究へと人間の精神を導く。

3.考える葦[⑪ パスカル] 『パンセ』

(1)[⑫ 考える葦]

・「人間は自然のうちでもっとも弱い一茎の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である」

→人間は自然のなかで最も弱い存在である。しかし、考えるということ、自分の悲惨さを知っていることに人間の偉大さがある。

(2)[⑬ 中間者]

・パスカルが考える人間の存在。人間を偉大さと悲惨さという矛盾する二面性を持つ存在であるとす。この矛盾する二重性はキリスト教によって説明されて救われる。

→「自分の悲惨を知らずに神を知るとは高慢を生み出す。神を知らずに悲惨を知るとは絶望を生み出す。イエス=キリストを知るとはその中間をとらせる」(『パンセ』)

(3)「[⑭ 気晴らし]」

・人間は死、孤独、無知など自己の飛散さから目をそむけ、遊びや娯楽や戦争などに熱中して気持ちを紛らわせようとする。しかし、自己から目をそむけて気晴らしに逃避してもやがては倦怠にとらわれて絶望うや悲哀に落ち込む。

・「気晴らし」をするのではなく、キリスト教を信じ神の愛によってみじめさをみつめる

↓

存在の根源的不安定さを直視

↓

神の愛を信じることに人間本来の在り方。